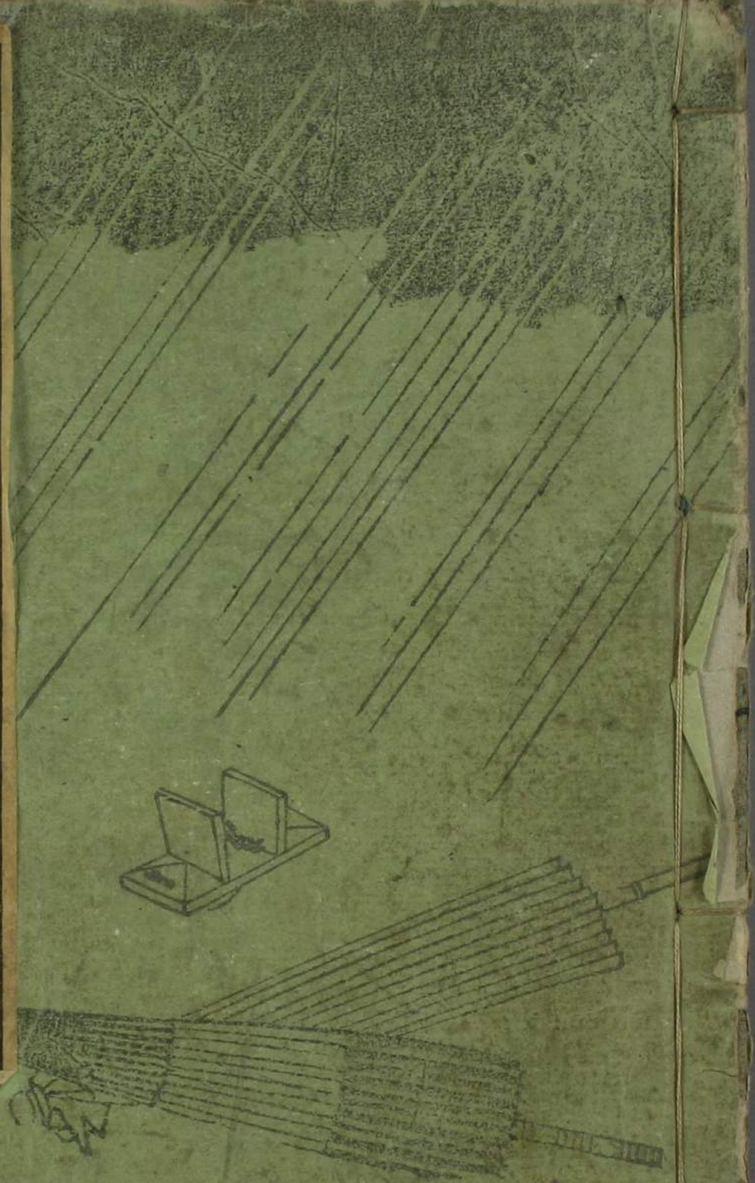
名古屋
山三郎
不破
伴左衛門

繪本稲妻表紙

一



へ13
3151
1

特へ13
3151
1
へ13 3151/1-8

喜怒可以勸善
哀樂可以懲惡

昔話稲妻表紙

大坂　三木書樓梓

東山八景

煙寺乃晩鐘れひゞきゝ絶たる川のほとりには
はちすの散乱すハ平沙乃落雁ともいひつべし
さしもまふさむの月うけし洞庭乃秋の
さかり絶まなきのもてはやしさゝめ海は漁村乃
夕照ハ法のちまれてあかね中紅にかふれ秋の紅葉

香はなし

六十一種まち名あるて法隆寺東大寺逍遥ともに
紅塵枯木まつ川法華経きれあつまりける

やはらし園城寺似あわ不二れ仏もむつまじき
阿伽陀般若鷓鴣あまた梅楊貴妃口しひ梅
あをわし逢みと津くし月龍田のみちれ外に
斜月白梅千鳥や法華老梅やさしうき
花の宴あけ不れ雪名月賀ん蘭のみ車橋あと数里
丹霞まされ飛ゝまえとハかとの須磨あり十の枕
隣家夕時雨のゆまくら有明雲井くれ
たまおきうつせ寛梅初梅紫早梅あれ枕ゆかなる

稲妻の
ちらつきまぶし　荷翠
見るうち
不破の関

傘ふ
ぶくう
かさふと
めと燕

其角

おどや山三

不破伴さぶりん

傾城の
賢かるべし
柳こう南

其角

ゆみんかうき

右東山い京者東二曲をむし宣町ゆ元れ御所町を
いとるるれ頃京者れうるむし小欲るむそのち
はるるこく堺の灣高三隆達ゝ老崎ゝ分を
あゝためうゆ元てう元ゝ隆達ゝ
いゝて世ゆ民ゆれ時代ゝ国あるをすてゝ

胚軒逞慾

○不破道犬　俳左衛門父

其角

あの声ぐ
石蜐
くらくふる
時鳥

回雪飛僊

○白拍子藤波幽魂

鬼貫

骸骨の
くゝ式
粧ふく
死見哉

食物も
喰
水くさし
魂祭

嵐雪

水寒陰薄

○六字南無右衛門

ゆふぎちや
細首ちうす

大井川

宗因

畫足蛇皮

○丹波國因果娘

蛇くふと
うつけで
おちろし

雉子
乃邑

芭蕉

守節握符

○貞婦・磯菜

言水

花瓜や
結とやらん
琵琶の上

天機心匠

○浮世又平重起

大津繪の
筆乃らくがき
何佛

芭蕉

裂石穿雲

○佐〻木桂之助國知

其角

七月々暮露

笛を聞

又平妹於竜

夜動畫藏

○銀杏前

嵐

閨のひま

其角

昔話稲妻表紙總目録

巻之一

一 遺恨草履　二 風前燈火　三 胸中機関

四 荒屋奇計

巻之二

五 厄神報恩　六 因果小蛇　七 呪咀毒鼠

八 暗夜駿馬

巻之三

九 辻堂危難　十 夢幻落葉　十一 斷絃琵琶

巻之四

非風非幡

○舊家怪

十二 修羅大鼓　十三 霊場熱開　十四 仇家恩人

巻之五 上冊

十五 孤鳩槁楢　十六 名畫奇特　十七 雪溪非熊

十八 花柳鞋當

全 下冊

十九 刀劍稻妻　二十 積善餘慶

以上

通計二十回

總目録終

昔話稻妻表紙卷之一

江戸　山東京傳編

一 遺恨の草履

今ハ昔人皇百三代後花園院の御宇。長禄年中。足利義政公の時代。雲州尼子の一族ふ。大和の國を領と。佐々木判官貞國とゝ人ありゝ。兄弟二人の男子をもてり。兄ハ桂之助國知といゝて。今年二十五才ありゝ。弟ハ花形丸〻〻十二才ありゝ。兄ハ先妻の子。弟ハ後妻の蜘手の方との腹出生しゝる子なり。桂之助の伯父ふ藏人貞親とゝ人ありゝ。是則判官貞國の弟なり。ゆゑふ一万町の分地を与へ同國平群ふ別館を造りてそこ名おさけるが。一人の娘さまゝけ。先ごろて夫婦となりふ名まゝ けりそのの息女容顔美麗なり。成長の後。桂之助の内室となり。名を銀杏前

とのゝ夫婦中むつまじく。ひとり男子誕生あり。其名を助若といひく。今年七方ゝとなりぬ。其比義政公京都室町ふ新館を営て花の御所と号し。兼て花車風流を好こゝろあり。近仕の士も列侯の子息のうちより。養男を撰び召つれるが。桂之助兼〻養男のきこえのふかりし。此撰びふ入て京都ふめさん。右近の馬場の旅館ふ住室町の御所ふ通ひて勤こゝろ。此度桂之助ふたゝびの〻上京しゝる家士へ。執權不破道大ゝ一子。不破伴左衛門重勝。長谷部雲六。笹野蟹蔵。藻屑三平。土子泥助。大上雁八なり。去程ふ桂之助妻子ハ国ふ殘しおき其身独長く在京御所勤の氣弱ゝなりしゆゑ。頃日ハ病ゝちふなりて折〻悩ゝみとべ一時家士等。桂之助ふ前ふ集。伺ゝ殿の鬱結を慰る支りやと評議しゝり。尚家の重宝ふ。巨勢の金岡が画しゝる。百蟹の圖しゝ。百種の蟹

繪巻物ゝり室町殿〻〻古書画を好こゝ給ふより。伴ゝふ達ゝ。清覧あるべきよゝ命ぜらるゝ。ければ国元より。名古屋三郎左衛門が一子。名古屋山三郎元春。彼巻物を携へ〻〻上りぬ。ゝち尚館ふ逗留して。ゝり〻ゝる。兼て大殿申楽を好ゝ給ふゆゑ。山三郎武藝のいとまに乱舞と学び〻〻扇ゝり〻名誉の者ゝり。けるゆゑ。皆〻口と揃へ〻〻ゝ山三郎上京こそ幸ひなれ。かゝる一さ〻舞せ〻御覧ゝ。ゝ。彼が舞ゝ国元ふ〻ハ度〻御覧ゝり。夏なれば。相人ゝ〻ゝ奥のゝまゝ。頃日待わく向ゝ御子ふ。藤波とゝを女ゝり。年ハ十七才のゝ。歌舞吹弾の業ゝ達ゝ。ゝゝと類まれなる美女ゝ。古の祇王祇女佛ゝりゝもとゝ〻〻ゝる者ゝ。彼を召て山三が相人ゝ。乱舞俳優を催ふ〻〻ゝ観物ゝ〻ゝと。伴左衛門とゝ〻わ。ゝれとゝ〻ゝるふゝ桂之助

大ふ喜び。夫きんわ〜奥わ〜んっ名ぎ催そべーと命ト けるべ。皆〜かー
こゝゆとつゆ〜退ぞ。日彼藤波。ゐ〜びふ囃方と召よせ。山之郎殿
くゆへて。乱舞俳優とさせ。美〜しく酒宴ゝまうけ〜。大ふ奥と催し
ゐうゆくて山之郎藤波うゐ〜種くの舞ゆりて後。酒盃の乱足。西寺
の嵐舞。無力蟇無骨蚯蚓の道行ぶり。福廣聖の袈裟求妙高尼の
繼絆乞あどゆふ。両人立合の俳優めりて第ひと生ー。終ふいさりて藤波。
男舞さつふ秘事と舞ね。これい昔後鳥羽院の御宇。通憲入道瓚波
の礒の前司ちふ女ふ。侍へさる舞ゐう金の立烏帽子。白水干ふ紅の
大口ちゑ太刀とゆひ〜立舞さゐ。誠ち沈魚落雁。羞月閉花の容
めりゆゆ〜を袖い鶯鳳の舞ふひ〜〜。歌ゐ〜ふ声い瀬伽の囀ぶで〜
ゐれば皆人感ふさ〜奇妙の舞妓やと。賞嘆の声ちゆ〜へゆゐ〜ゐ。

此時より桂之助藤波と恋そめ〜。病ハゆ〜〜う去只ひ川の水胸
ふゆふれて恋の淵とゆり。舞とゐふ真よせ〜。度〜めーよせゆる。
つひふ俳優ゆ〜ぶゆ〜〜ひゆ〜〜。藤波と桂之助の妻ふめ〜ゆ〜。舘ふ
引ゆりて給仕させ〜ゐべ。桂之助望ゆ〜最愛ゆ〜めゆ〜ひ。これが
妹ふ於艶ゆ〜。今年十三才ふゐる少女のゆりけると。これとも舘ふめー
よせ〜。藤波ゆ〜ゆ〜ひふさせめ。藤波も桂之助ゆ美男ゐふめて。
誠心と尽〜ー。鴛鴦の契浅〜ゆ〜ゆ。桂之助ものゆ〜御所の勤仕ゆ
〜ふゆりめ。されゆ〜侍臣ゆ〜ふ〜れを幸ゆ〜。昼夜ゆ〜ゆ〜ゐ
ゐゆ。拍子人ゆりて。酒宴嬉樂ふの〜〜ゆ〜〜せゐ。音酒珍膳席上
ふ〜ゆ。郢曲謳歌室中ふゆまびゆ〜。恰も妓家娼門の所行ふ似〜。
うゆて〜ゆりけゆ形勢ゆり。山之郎逗留の間。此乃体を見聞して。只

独胸をいため安き心ハせざりけり。あるおりに伴左衛門いつのかどよりか。
藤波に恋慕し。千束の艶書をおくるといへども。藤波ハ手にもふれず。
尽しけれども。一言の返答だにせず。伴左衛門一向おもひとゞま
らず。折もがなとうかゞひ居たりしが。おりしもをかしつかさどる藤波ひとり
あれハ彼が恨憤らんことをおそれて。心一ツにとゞめおきけるが。今ハゆるさじと
と得ず。桂之助に艶書を見せて。彼がおもはぬ所に告げ。桂之助ハ
短氣の生れなれバ。心狂しくなりける時なれバ。これを聞とひとしく
奮然として怒氣天にさかのぼり。急に伴左衛門を呼出し。其艶書を
とりひろげてよみければ。汝藤波に不義をいひかけ。数通の艶書を
おくる条。罪科甚重し。後日の見せしめに。我こゝろ手討にせんと
ありといひをはれども。白鞘巻を抜かけしけれバ。次の間にひかへたる

山三郎いそがはしく走り出。袖にすがりて押とゞめ。詞を尽してなだめける
にぞ。ぜひなく刀をおさめ。さらバ汝にめでゝ一命をたすけ。長く勘当を
ゆるさず。かさりに命じて。伴左衛門が大小をもぎとらせ。庭上に引おろさ
しめければ。伴左衛門ハ一言の分説もなく。只打しほれて伏居たる。桂之助
山三郎を顧み。汝上草履を以て。伴左衛門が面を打。辱めを与へよと
命ぜば。山三郎頭をさげ。御憤ハさる事なれども。さりながら彼ハ。執権職にも
仕る道犬が児子にて候べし。この儀ハとまつりハされ下されよと願ふ。
聞入れず。いかに彼がごとき人畜ハ。面に糞汁をそゝぐとも飽たらず。ともかく
打よ。ふたゝび我命を背くな。いさかれつゝ。山三郎おそれつゝ。やむを得ず背
かハゆけれども。傍輩の因身武士の情にゆへば。辱るにしのびず。押して願ふ
手打といふとも捨てはいかく。何の宥免かあらん。汝若打ずんば汝を

佐〻木桂之助
恐て家士名古屋
山三郎が命じ上
草履をもって
不破伴左ヱ門が
面を
打

桂之助

おとく

藤波

なごや山三

不破伴左ヱ門

勘当あり。打べきや打まじきや。返答せよと。せきふせたる詞ー
けるに。山三郎まちうけ。毛非ふ及ぬらぬ。いとゞ違背仕るべきぞと。
袴のくゝり引めげ。上草履をとりて庭ふとり立。庭下駄をあ〜〜〜。
石垣つゝひ。伴左衛つが傍ふちゝづれ。義令あれば せんをべなー。かゝ〜ど
恨みあと。耳ちゝ〜いひこさけく。草履をめげ。面をかけく一打うち。
退んとをれと。桂之助禄先ふ出て一見ー。めな手弱ぞ山三郎。数あく
打〜厚めうとめふせけるに。やむこゝ成得ぞ立りぞり。又ちゝ〜こ連打
ふ打〜こふど。伴左衛つが鬢髪ときれ。鬢髪乱れ〜〜ふちのびぬ
形勢あり。桂之助呵〜〜と打笑。こゝ見物ふあ〜
ぞや。〜〜引〜〜後門より追拂へと命ぞ。〜〜奴僕等割竹を
とりて庭ぐゝひふ出来り。いざ〜〜追立けるに。伴左衛つちふ〜

立めぐりて。ちぐふ衣服の塵を打拂ひ。山三郎を尻目ふ見〜そのそ
ゆとれ。これぞ遺恨の起〜〜〜〜後ふぞちひ加〜見〜〜。かく〜〜後山三郎。
ちぐ〜〜諫言とりちひれども。桂之助聞ぐりもはのど。佞臣等ー
山三郎とそ不ざけんと計。一向めく〜〜ちりあとふより。桂之助山三郎ふ
召出ー。百蟹の巻物ぞ覧をこゝあべ。仕方より別人とゝく〜りどとべー。
汝が役目をこゝ〜〜れ〜〜いとづゝふ在京せんも親人のおやとゝ所いぐゝ。
ちゝ〜〜阪國いとゝべとかれべ山三郎心あ〜ぞとゝくぐる君命ぞ。
俄か行装とちのく〜国えへまちゝくぐらめ。ちゝりしゝり後ふ。誰悔る者
しゝ〜〜。室町の御所へ重病と披露ー〜〜出仕とやめ。日夜の酒宴
糸竹の調ふ。春の日を暮あんこゝ成花かあ〜〜。秋の夜も短〜〜と
月ふかちち。更ふ本性ふちりけと

二　風前の燈火

爰ふ又山旅館とめづれる家士ふ。佐〻良三八郎とゝ。忠臣無二の者
ありけり。そゝ〻妻子ふ伴ひて当館中ふ住けるが。山三郎　飯國の後
へ。桂之助の刃ふ持益め〻〻　成行くるを泣く〻悲〻。主君の前ふ出〻
諫けるふ。虚病とかまへふのくるを。旅館ふ妾とめつゝひふ放供
無懇の御行跡若室町御所ふきこえあり。ゆゝしき大変御家ふを
かなしくこゝふたんへりこひねがつゝ花波ふいとまをつゝへられ。ほん刃持を
めゝとめくるゝ。ものゝ憚る所ふ。やはりむとのゝ〻。ちゞ〻
諫言せゝるゝ。桂之助耳ふも実のゝ。日ふ日ふおゆて悪行ほのりくれゝ。
三八郎熟ありひけるへかくなゝり詞を尽〻理を糺て諫まゝるふ。御家
入かくくへはせんそゝ。これ畢竟花波が邪香ふ迷ひふのゝ。

彼わるゝ限ふへいふ諫やをとゝも悪行やむべゝゝ。根をとゝて葉をかゝ
きの陰ふおれゝ。折をうゝひ花波を殺〻。おのゝ頭かきやぶりて死るふ
ちがひ。科なき女を殺ハ情なゝ〻とゝいへども。御家ふハかへゝ〻。越の范蠡
西施を呉湖ふ放ちゝる例もあるものとゝ。つひふ心ふ決〻よゝ折を
かのとゝ居るふ。一夜時あゝね夜嵐の烈〻ゝを幸ひとし刃軽ふ
打扮〻奥庭ふまのび入。樹木の茂ゝゝ所ふかくれゝ。花波が部屋
ふ下ゝ待居ゝり。花波ハかくとハ露ゝゝゝ子をゝゝ比殿の前を
退さ。わろ碎の機嫌かゝ。ゝゝゝ手燭をゝ。濃紫の小袖のはを
ゝゝめて。長ゝ廊架を歩ゝ来ゝ。三八郎かくとゝるゝ氷をかゝ
抜そべか。今ふ盛ふ咲乱まゝる。山吹躑躅早咲の蕊子花を踏ちゝ
やり水の流ふ一そべゝゝたる。庭石を花越〻。廊架の手ゝりの下を

佐々木の家士
佐々良三八郎
忠義の為
白拍子
藤波を
殺す

佐々良三八郎

藤波

つゝひ芭波ゞ踊をつけ〳〵。今や斬ん〳〵とつけねらふ。芭波ハ行の心もなく
歩〳〵けるゞ。此時一命の終るべき宿世の因果ふやめりん。風雨さもしく
つよく爛熳たる庭木の櫻を吹ちらし〳〵。吹雪のごとく散わ〳〵り。手
燭と飆と吹けして忽真の闇となる。嗚呼彼ゞ命の危さもげふ風
前の灯火あり。芭波進退を失ひ心たゞひるゝ而ふ暗裏ふ剣の
光り電光石火と閃きくるめび驚ゑて逃ゆんとさるゑ。こハ郎とぞり
わ〳〵〳〵斬つけるゞ。暗中うれば目嵩ちがひ〳〵室を斬。これを又斬
剣の下をくぐりぬけ〳〵。猶逃去んとしけ且ども。餘りふ驚ゑ。身うち
ひゝゑ足ゑへぎ〳〵走るとわ〳〵わぞ。夢路ふ迷ふごゝ〳〵あり。こハ郎ハ
息をこらしあらゝと探り〳〵立まろり。めつゝと斬ふきりけるふぞ。芭波
振袖の袂を斬落され。危く身ハ避られども。目前ふ剣のひゝわく